

2019 年 7 月 6 日

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 29

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

補遺 20 において、1930 年代に特務艦勝力が海図作製のためにスプラトリー諸島の測量を行ったことを記述した。その測量事業について別の資料でより詳しく作業日程を確認することが出来たので、紹介しておきたい

その資料というのは、勝力の鑑内で発行されていたガリ版刷りの『勝力新聞』である。そのうち、昭和 11 年 4 月～10 月の分（第二輯）の復刻版が『艦内新聞集成 三巻』（不二出版、2013 年）に収められている。言語文化研究所は、昭和 11 年・12 年のそれぞれ第二輯の現物を所蔵している。

この新聞は基本的には両面刷りの一枚モノで毎日刊行されていた。題字の下の方にその日までの母港からの総航行距離（浬）が示され、どこかに停泊中の場合は「作業地泊」などと記されている。また、港への出港・入港についても情報が掲載されている。

4 月 10 日発行の 1 号には次のように記されている。

栄光ニ輝ク我勝力ハ本日ヲ以ッテ再ビ第二期作業実施ノ為威風堂々台湾南方海面
ニ勇躍航進ヲ起スニ至ッタ

また、9 月 8 日発行の 142 号には次のような囲み記事が載せられている。

本年測量班作業遂行ニ対シ酷暑ト闘ヒ風涛ヲ侵シテナサレタル御援助ニ対シ感慨
無量ノモノアリ。

抑々測量班作業ハ測量艦ノ後援ヲ絶体 sic ニ必要トスルモノナルコト勿論ニシテ
将来共何分ノ援助ヲ切望ス。

近ク退艦セントスルニ当リ過去数ヶ月ヲ追想シツツ此处ニ满腔ノ謝意ヲ表ス。猶
一行動ノ上御任務達成ノ上無事母港ニ帰港セラレンコトヲ。

測量班一同。

勝力に測量班が乗船し、台湾南方海面の測量作業に従事したことが知られる。具体的な作業地については記されていない。第二期の作業とあるので、これ以前から測量が行われていたようである。

この新聞に記された情報によれば、勝力は台湾南端の高雄及び澎湖島の馬公を拠点として現地に赴いて短期の測量を行うことが繰り返された（基本的に高雄→馬公→作業地→馬

公→高雄)。「作業地泊」と記されているのは次の期間である。また[]内に作業地泊の前日の総航行距離からその前の回に作業地から馬公に帰還した日(最初は日本から馬公に到着した日)の前日の総航行距離を引いた数字を記すことで、馬公から作業地までの大まかな距離感を示しておきたい(作業泊や馬公・高雄入港停泊の日の総航行距離は記されていないので、その日の航行距離が不明である)。

4月24日～5月6日

[801.5 浬]

5月20日～6月3日 5月30日からは別の作業地に移ったことが記されている。

[855.3 浬]

6月18日～7月5日

[954.1 浬]

7月21日～8月8日

[854.9 浬]

8月23日～9月3日

[739.1 浬]

9月16日～9月17日

[891.3 浬]

翌年昭和12年(1937年)3月21日刊行の1号(第二輯)には「昨三月二十日浮世ノ春ヲ外ニシテ台湾南方海面測量ノ為メニ母港ヲ進発ス」とある。しかし、1936年は高雄一馬公をもっぱら拠点として南シナ海方面の測量を行っていたのに対して、この年は基隆に寄港するなど複雑な動きを示すので、南シナ海に限らずより広域の測量を行っていたと推測される。丁寧な検討が必要だが、ここでは擱く。